
アラブにおける剣道指導の諸問題

ー日本文化とアラブ文化の比較を通してー

笠井 和 広

一. はじめに

現在、剣道は国際的に著しく普及発展し、30カ国以上で愛好され世界選手権も行われている。しかし、日本特有の文化の中で発祥した剣道が歴史、宗教、習慣等の全く異なる国々で本来の目的を失わず、正しく理解され普及発展することはきわめて困難である。

以前、フセイン政権下のイラク共和国とエジプト・アラブ共和国において剣道指導を行った経験から、アラブにおいて日本剣道の本質への理解度は著しく低い。これは、かれらがイスラム教徒であり我々日本人には、なじみが薄く理解に困難な部分をもつイスラム文化のなかで生きてきた歴史があるからと言える。だが、アラブにおいては多くの親日家や日本文化の愛好者が存在する。現にエジプトでは同国の英雄であるロス・オリンピックで武道精神をもって戦った銀メダリスト、モハメッド・ラシュワンは日本人指導者の下に指導を受けた日本武道を理解するアラブ人であり、他にも日本への憧れとともに日本武道を学ぶ人達も少なくない。

今後アラブにおいて、本来の日本剣道を普及するのには、剣道の本質を踏まえた上で剣道が有する日本文化とアラブにおける宗教・習慣・民族性等の相違を比較検討し、指導方法をみいだすことが肝要と思われる。

二. アラブについて

アラブ民族のもつ文化からアラブという意義は、一般的にいう民族が祖先から子孫へと受け継いだ思考、および行動などの様式である。そして、このアラブを今日の視野でみると非常に多様で理解しがたいが、多面アラブは強い連帯感、同胞意識で結ばれ、その点では一つに、まとまった形をなしているのである。しかし、アラブを一つの民族として結びけているものは何であるかといえ、それには次の重要なことからアラブ文化というものをみることができるのである。

それは、予言者マホメットの受けた掲示を基盤とする宗教としてのイスラム教と、そのうえに築かれていった歴史遺産なのである。⁽¹⁾ そのイスラム教と、それを基礎におく歴史的遺産を共有することによって、アラブは民族としてまとまりをもつのである。その共有財産としてのアラビア語は、各アラブ諸国の方言としての「アンミーヤ」ではなく「フスハ」といってよい。「フスハ」とはイスラム法典の言葉を基礎に紀元八世紀に成立し、千年以上も文法の構造などの根幹となる面は変化せず今日に至っている。それはイスラムにおいての経典は一字一句が神の言葉であり、これには人間が手を加えることができないからである。そして、「フスハ」は各地の方言として私的レベルの話し言葉ではなく、アラブ人の生活の知的レベル、および公的な場の話し言葉ではなく、アラブ人の共通語なのである。⁽²⁾ このように文化面からイスラムとそれに基づく歴史的遺産を共有し、アラビア語を母語とするところがアラブといえるのである。そこでアラブ人について、人類学者アニサ・ハマディはアラブ人の気質に関する著書³⁾において、アラブ人を定義するのにバーナード・ルイスの「歴史の中のアラブ人」を引用して、「アラブ人というのは、一つの国民といえるが、まだ法的な意味のナショナリティはない。『私はアラブ人です。』と名乗る男のパスポートには、シリア人、レバノン人…あるいはアラビア半島諸国のナショナリティが書かれている。いくつものアラブ国家があり確かにアラブ連盟もある。しかし、すべてのアラブ人を国民

とする単一国家はまだ存在しない。だが、アラビアズムに法的な内容はないとしても、アラビアズムは現実にある。アラブ人たちの“アラブ王国“に対する誇り、アラブ同士をむすびつけ過去および現在の連帯意識は強烈なものがある。」といっており、さらに「その人たちにとって歴史の中心的事実は、予言者マホメットの布教活動とサラセン帝国への追憶であり、それに加え、自分達の共有財産として、アラビア語とアラビア語に愛着をいだく人たち、そういう人たちはすべてアラブ人である。」と定義している。⁽³⁾

このアラブ人というのは、イスラム教とアラビア語を基礎として、個々のメンバーが共通文化として、生活様式、社会習慣をもつことが重要であり、統一された国家があるのか、ないのかは不可欠の要素とみなすべきでないのである。

三. 剣道の倫理性とアラブの倫理性

1. 倫理感

剣道の倫理と深く関係する武士道精神は、儒学の「五倫」という人間関係を確立される「君主・父子・夫婦・兄弟・朋友」相互の道が淵源である。そして、その「五倫」の関係を確立する精神が「五常」という「仁・義・礼・智・信」であり、これらの儒学思想が、剣道のもつ倫理といえる。⁽⁴⁾

この剣道における倫理は、徳川時代に儒学が隆盛を極め、多くの儒学者を排出したときに生まれたのである。その儒学者たちは、武道や武士道に関して論じていることが多かった。儒学といっても学派・学者によって違うのであるが、儒学の意するところは、人間性の倫理、道徳を説くところにある。従って、江戸幕府の文武奨励化において、当時の学者の多くが武士道・武道を説くのは当然であったのである。その中でも山鹿素行をはじめ熊沢蕃山・中江藤樹・貝原益軒らが多くの著書を出している。これらの儒学者が武道において重要視しているところに「文武に徳と芸との本末あり、仁は文の徳にして、武芸の根本なり。軍学・射御・兵法などは芸にして、武芸の枝葉なり。

根本の徳を第一に務め学び、枝葉の芸を第二にならい本末かね備り、文武合一なるを真実の文武といい真実の儒者というなり。(中江藤樹・文武問答)」といい、武道における「仁」と「義」を強く現している。そして、これらの他の学者にもみられるのだが、ただ単に、これらのことを唱えているばかりでなく、武道教育の実際においても重要視されるものなのである。

剣術書においては「孝弟忠信の四ツを以て身を修め、人倫の道を弁へ諭るべし。士の道を嗜むというは、孝弟忠信の助けなるに弁ざる者は、技芸のために石の四ツを毀ふ者も少なからず。……又文武の極は、序にいふ如く、智仁勇の三徳なる」⁽⁵⁾といい、夕雲流剣術書に「天に備リテ理ト云モノアリ。這ノ理中ニハ、元・享・利・貞ノ四徳ソナハル。某天ノ理ヲ感得シテ人ト生ル、時、性ト云モノ具ハル。其性中ニ、仁義礼智ノ四徳ソナワル。此則チ天理中ノ元享利貞ト、人性中ノ仁義礼智サラニ別ナラズ」⁽⁶⁾といっている。これらの剣術書においても、剣術の意とするところは、倫理的要素が必要であるとしながら、それが欠如すれば、いかに技術に勝っていても、その身が修まらず技術も正く要をなさないとするものである。そして、君主・父母をはじめとする人々を害し、ひいては国家・社会をも害をおよぼすことになるとしている。さらに技術も倫理性とともに上達することが重要であり、倫理性と技術は一体となすもので、倫理性は技術の厳しい習練によって、さらに教養が加えられることで養われるものなのである。よって師は師としてのつとめとして修行者に技術習練を通して、倫理・道徳性を涵養させ、修行者は師の教えに従い、さらに学問にも精進し見知を広めて剣道を通じ倫理・道徳の修養に心掛け、日常おごらず修行することが肝要であり、これによって倫理を学ぶのである。

アラブの倫理とは、アラーの予言者であるマホメットがアラーから受け取った啓示を結集したイスラムの聖典(コーラン)に依拠しながら、ムアーマラート(倫理的規範)とよばれるものからなる。この聖典に指示され倫理を含むものがイスラム法として体系化されている。このイスラム法は、イスラ

ム教徒が行うべきアラーによって定められた人間の本分たる道を表している。それは基本的な宗教上の義務である五行、それに付帯する儀礼上の諸問題についてまで細目にわたり示している。その例として礼拝を行うにあたり、齋戒沐浴から葬儀の行い方までも規定し、さらに世俗の問題に属する公法・私法間で定められるようなものまで規定している。このように、われわれが考えている法の範囲外というべき宗教上の儀礼をはじめ道德規範までも含んでいるのである。それは、

1. 信条一神・天使・経典・予言者・来世・天命の六つから成り立つ六真。
2. 道德性—コーラン・伝承に命ぜられている誠実・神への帰依・謙虚・脱俗・満足・寛大・忍耐等のような道德上の諸徳。
3. 勤行—六信の実践面たる五行・聖戦。
4. 和解事項—人と人との間の一切の義務を含み、論争・婚姻・保証の三部に分け、物々交換・売却・代理・結婚・組合・請求権等民事関係の一切規定。
5. 刑罰—コーラン・伝承に規定された刑罰、例えばあだ討ち・盗みの罰としての片手切断の刑・私通・姦通に対する石擲の刑・背教に対する死刑等、以上である。⁽⁷⁾ さらにそれを五つに分け、
 1. 義務的なものであり、怠れば処罰されるような行為。
 2. 義務的ではないが、実行することが望ましい行為。
 3. 行っても、行わなくてもよい行為。
 4. 禁止されてはいないが行わないことが望ましい行為。
 5. 禁止されており行えば処罰される行為。である。

ところで、われわれの法的な概観からすれば、法の対象となるのは、後者の1と5に属するものといえる。普通、法の存在する意義は義務の不履行・禁止項目に反することについて強制的な力を持つと考えられる。そして、1と5以外の行為は、全く各人の意思・判断に委ねられる。たとえば親に対する孝行は、それを行なわなくても直接処罰の対象にはならない。だから、この

種の行為はわれわれの考える法からすれば直接処罰の対象とはならず、法とは別の道徳的なものに属するものである。しかし、イスラム法は、我々が考える法にあっては法の対象とはならぬ諸行為、つまり2・4に該当するものに関しても権力をもち積極的に指示し、道徳性の涵養まで奉仕しているのである。

2. 礼儀作法

剣道を行う事で重要な一つに礼儀作法がある。これは道徳的精神の鍛練をする事が目的であり、心より師を敬い、長者を尊び、同輩と相親したしみ、後輩を慈しむようすることである。⁽⁸⁾ この礼儀は正当なる事に対する尊敬、すなわち金銭的でない社会地位に対する実際の価値に基づき尊敬するものであり、厳格な礼儀の遵守の中に含まれ道徳的訓練でもある。また、「人間が全人格を率直に暴露して鬭争に鬭争を重ねた場合、そこに互いに愛を感じない訳にいかない。戦って敵を愛する気持ちが最後に引き起こされる。戦うにしても礼を正さず戦い、恥を忘れて戦うようでは日本剣道は、価値のないものとなり終わらねばならない。」と礼儀は戦いの中において、慈愛まで生むものとしている。⁽⁹⁾ それも礼儀には自然の発露であって形成をきらい、虚礼ではなく心からの礼儀でなければならない。そこには現代剣道においても特に礼儀を厳格にしている。それは竹刀で相手を直接打突するという激しい格闘形式であるので、相対するものが互いの人格を尊重し、自らの威儀を正して礼をして最善を尽くして行うもので、心をこめて礼を尽し終える事が重要視されるのである。これは「礼に始まり礼に終わる」という言葉に代表されているといつてよいのである。

一方アラブ人の行動や生活はイスラム教から生まれた礼儀作法が根づいている。このイスラム教では全能の神アラーの単一性からきているもので、アラーは天と地をはじめに、この世のものをすべて創造したとする。すべての運命は神によって定められるとアラブ人は信じている。その神が遣わした予言者マハメットで神が予言者に一方的に伝えたのが「コーラン」であり、こ

れが神から啓示された「神の言葉」なのである。⁽¹⁰⁾ イスラム教徒は、この「コーラン」の定める五つの戒律を励行しなければならない。それは、信仰の告白と礼拝・喜捨・巡礼・断食があり、その中で心を神の方向へ転じ、神との唯一の交通手段である礼拝を日に五回行う規定がある。これは、礼拝堂以外でも清浄な場所であれば行ってよいとされている。だから、アラブの人々は道路でも部屋の中でも場所を気にせず行っているのをみかける。

この礼拝をはじめとして神の名による礼儀作法のきまりは数多くあり、アラブ人は神の名を出して仲間との付き合いを始め、多くの礼儀作法を守ることが義務づけられているのである。これが厳格であり、各個人が自由に独自の方法で礼儀正しさを表す余地は残されていない。行動を律する様々な規則は感情が込められ、風習が結び付き、礼儀正しさの中には個人よりも全体や各集団がはっきり優先するという面が見られるのである。⁽¹¹⁾ それはアラブ社会で他人と同じようにやることを強く戒めた結果ではなく、彼らの宗教上の伝統的な決まりからきているのである。

アラブ人の礼儀作法は、神の名があらゆる機会・発言・願いに使われている。それに比べ日本人の場合の礼儀作法は、日常的な作法と宗教的なものとで、はっきりと分離されている。その方法は形式が重要視され、その中に内面的な精神がなければならないとしている点で、両者の間には礼儀作法に根本的に相違がある。日本では、剣道の中に道徳的に礼儀作法が存在すると考えられており、そこで修行しなければならないとされ、剣道の修行は礼儀作法に結びつくとし、また、そうでなければならないのである。しかしながらアラブ人はイスラム教における宗教的な感覚から礼儀作法が重要であるとしているのである。両者においては感覚的に違いがあるが、礼儀作法を学ぶことは、ともに重要であるとし、形・思想・宗教に違いがあっても人間としての礼儀の重要さは共通するものと思われる。

剣道で礼儀作法を重要視して正しく指導することは、宗教的なことを配慮しながら行わなければならない、礼儀に厳しい感覚を持つアラブ人には剣道に

ついでに日本精神および、日本式の礼儀を正しく受けとめて理解するものと思われる。

3. 名誉

武士の世において名誉は常に武士の身分に伴う義務として認識され教育されていた。「武士道」においての名誉とは人生最高のものであるとし、⁽¹²⁾「武道初心集」⁽¹³⁾では、戦いにおいて名誉の働きをすべきであり、そうであれば小心の武士であろうと名誉の働きした者は書物などに名が残るとされ、「晴なる討死をもって名を後世に残すべし。(武道初心集)」と武士は名誉の討死を遂げることができれば最高の面目であるという名誉を重んじていた。しかし、その死とは犬死にではなく、君主に忠節を尽くした働きによって武士としての死に方をすることで、それにより家の名声となり、その家は代々君主により保護されて家の繁栄にもつながることでもあったのである。このように武士は、君主・家族のため幼少の頃から名誉・名声のためであれば生命をおしむべきでないとされ教育されていた。そして、名誉が生命より高価であると思われたときは、いつでも生命を棄てる覚悟を持つべきであるとしていたのである。この教育についてはオランダ人医師ケンプエルの「江戸参府記」⁽¹⁴⁾の中でも書かれており、外国人からみても当時から名誉の教育がされていたことがわかるのである。

一方、アラブにおいての名誉とは戦いに通じる。特に女性にかかわる名誉の問題は最も大きくなる。アラブにおいての女性は身内の男性・父子・主人などに従属する立場におかれ、男性の女性に対する権利は財産に対する権利と同じものと見なされている。特に性に関する規範は倫理的な思想によって定められ、女性においては未婚・既婚を問わず純潔と定説が強いられる。女性の性に関する行動は女性の名誉そのものと等しく、他方では男性の基本的な身内の女性の性行動にかかっている。したがって女性の名誉を守ることが男性の任務になり、女性の名誉は不可侵のものと考えられ、女性の不道德な行為の汚名は男性の上にかかってくる。そのため男性は女性の名誉を守らな

ければならないのである。⁽¹⁵⁾ このようにアラブの名誉とは、武士道にいう君主・家族のために戦う名誉でなく、主に身内・自己の面子に関わることににおいて、けがされれば、その名誉のために戦うのである。

この両者の違いは、日本は失った後に得るものがあり、アラブでは失ったものを回復することに重点をもつところにある。アラブでは「アラブ人を怒鳴りつけ、小馬鹿にした呼び方をすれば相手はすぐにナイフを抜く。」といわれており、アラブ人の前で名誉を汚すような行為は師と弟子の関係が深くなるまでさけるべきである。また名誉の裏側には、自己の尊重と他人との間に差をみせたいという優越感の願望があり、⁽¹⁶⁾ そのためにはメダリストという名誉的なことを目標に行う意識があり、勝利を勝ち取るための指導も必要であると思われる。

4. 忠誠心

日本の封建社会では、目上の人に対しする無条件の忠誠心が封建社会をささえるものであった。これは血のつながりのある親、臣としての主人に孝に励み、忠を尽くすことが武士の生き方とされていた。この忠とは、まず直接の君主と親に尽くすものであり、これが国家への忠誠なり、封建時代の忠誠は武士道をもって学ばれたのである。⁽¹⁷⁾

アラブの忠誠心は「個人的な関係を通してのみ呼び起こされ、基礎的な役目を果たすことを意味する。」⁽¹⁸⁾ といわれる。このように同じ仲間同士の中で生じるものである。それは、アラブ人は昔から自分が大きな中の一つであるという国家を感じさせる条件がなく、部族・家族を除いて彼らには忠誠を尽くすものがなかったといえるのである。⁽¹⁹⁾ このことはアラブ人にとって忠誠とは強いものへの忠節はなく、仲間に対する忠実な献身を意味すると考えられ、この忠実さは肉親の概念と密接に結びつくものといえるのである。

日本とアラブの忠誠心には直接的な目上である君主・親と主体対主体の仲間、間に忠誠を尽くすという違いがある。なかでもアラブ人社会では一族の中で、地位が上であるという敬うべき人に忠誠心をもつということはすくなく、個

人や集団にかぎらず部族のメンバーおよび保護の約束を結んだ他人を守ることが忠誠としている。

そこには剣道指導にかぎらず他の指導において、アラブでは弟子が師に対して忠節的なものはないと思われる。だが、「アラブ人は階級に対するきわめて水準の高い敏感さを備えている。」とされており、初めに指導者と弟子との位置関係をはっきりとし、自分は師であるという社会的地位を認めさせて差をしめし、アラブにおいては、いかなるときでも師弟関係には一線を引くことが肝要なので、そこに師と弟子との関係における忠誠心が生まれるのである。無論、かれらの師となるには、人格・実力が伴うのは必要条件となるのはいうまでもないが、この関係を継続するには飲食等において親しくしてはならない。日本では師弟間における飲食時に、日本人の視野において師弟関係の形が少々崩れても精神的つながりは崩れることがないと信じているが、アラブでは少しでも外面の形が崩れたときから師弟ではなく、単なる友人とみなして精神的な真の師弟関係までも崩れてしまい、いかなる場合でも親しくすべきでないのである。⁽²⁰⁾ アラブ社会では、この一線を引き、厳しい態度で弟子に接するのは自然であり、このような態度をとっても指導者の人間性・資質などを問われることはなく常に指導者として毅然とすべきである。

5. 目的

現在、全日本剣道連盟が定める剣道の目的は、「修行することによって、剛健なる気風を養成すると共に、忠君愛国の思想を鼓舞し、忠孝の大義を明らかにし、忠実なる義侠心と崇高なる徳義心を会得し、尚武・礼讓・沈着・忍耐・勤勉・質素の諸徳を養ひ、併せて身体を強権にし、之を実践躬行して将来有無の人物となるのが目的である。」と人間形成を目的としている。そして、伝書やその数々の教訓による「わざ」を修行することによって、勇氣・決断・敢闘・忍耐・公正・礼儀などの剣道精神による人間形成ができるとされている。また、理（心）と事（わざ）の修行において自己の形成を行い、さらに家族も社会もよくなる「社会形成」を行うようにしなければならない。

この人間形成によることで人間社会を形成することが剣道の目的であり、そのことを「剣道は剣の理法の習練による人間形成の道である。」と剣道の理念に現している。⁽²¹⁾ このように剣道の目的は剣道修行において、前述した儒学にいう徳目を学ぶことにより人間形成するといっているといえるのである。アラブにおいては、剣道を行うことで人間形成をするということを説明しても理解することはできない。それは、アラブ人はイスラム教における宗教的・倫理的教えを信じ実行することがイスラム法により義務づけられているのである。このイスラム法に示されたとうり神を信じ、教えを実行の結果により自己の形成に自己の形成に通じるとされているからである。そして、この自己形成は現実において利益があるものではなく、死後、神の審判を受け来世で天国へいるための準備とする来世利益なのである。⁽²²⁾ ここには日本人とアラブ人の人間形成の考え方の違いがある。だから剣道で人間形成といっても、イスラム教を中心として生きているアラブ人にはあまり関心がないのである。アラブ社会は、きびしい自然の中で部族間で生活権を守るために戦い、東西の強大な敵と戦う強さが必要とされ、相手に打ち勝つという技術と気迫を優先させてきた。よって、アラブ人は剣道を精神修行ということのみで行うのではなく、アラブの闘争の歴史から反映されたと思われる自己防衛の意識から剣道を学ぼうとするところがある。⁽²³⁾

このようなことから剣道指導の際、アラブ人には剣道は長い日本の歴史の中で宗教や学問などと結びつき武士道として確立し、日本人の生き方や人間性を高める道徳が含まれており、剣道を修行することによって人格を高めるものであることを強調し、イスラムの教えにも通じることを悟らせる指導が必要である。

四. 指導上の留意点

1. 座礼

剣道は「礼に始まりれいに終わる」といわれ礼儀が重要視されている。こ

れは封建時代のように上下関係を明らかにすることではなく、横の人間関係から相互協力な立場に立って相手の人格を認め、それを尊重する態度より出発し、互いの理解と協力によって成立しているといえる。無論、年長者に対する技術・人格に対する尊敬・畏敬や指導を受ける上の感謝の心から自然にでる礼儀として当然である。⁽²⁴⁾

このように礼儀の意とするところは、己の心を正しく人に対することであり、剣道を学ぶものにとっての心得の一つである。だが、内面的に相互に人格を尊重し合い、形式的な形を伴わなければ意味をなさず、それは日本の伝統より形と心が一体とならなければならないとする考えの表れでもある。⁽²⁵⁾

剣道の礼儀の一つに座礼があり、それを行う要領は、「上体をやわらかに前方にまげると同時に両手を両膝の前に出し、両手の食指と拇指で三角形ができるように両手を坐面について、其三角形の上に鼻があるようにして行なうのである。」⁽²⁶⁾ としている。このような形で座礼は行なうのであるが、アラブ社会においては、いかに剣道愛好家といえども、座礼を多数の者は行なおうとしない。これはイスラム教における宗教的義務に五行というものがあり、その中でも最も大切なものといわれる礼拝の形に座礼の形が似ているからである。この礼拝とはアラーに対する敬服の証しであり、アラーに向かっての誠心誠意をもってする祈願の最も恭しき表現でもある。この礼拝こそ神との交流唯一の方法であり、心を浄化するものでもあるとされている。コーランによれば、礼拝に関して「マホメットは自分に掲示される経典を誦でおればよい。そして、礼拝の務めをよく果すように。礼拝を行えばわずらわしいこと、いやらしいことが徐々になくなるものである。いずれにせよ、アラーの御名を唱えることが何よりも肝要。すべての者の行ないはアラーが御存知である。(コーラン二十九章四十四節)」といっている。

この句に示されるように、イスラムは礼拝を人間向上の手段ともみなされるのである。しかし、日本の礼儀と同様に形式化のみで誠を欠いた礼拝は禁じている。これを一日五回、日の出前・正午過ぎ・午後・日没後・就寝前に

行われ、その方法はメッカに向かって起立して心を落ち着け、両手を耳の高さに上げ、その両手を下ろして体の前で組み、両肘を両膝に付けて腰を曲げ、それから直立した後、額を床につけ跪拝し、さらに正座した後に跪拝する。その動作中においてコーランに定められた句を唱えなければならない。

このように正座をして例を行なうものであるが、イスラム教での礼拝は剣道に行なう座礼と形がよく似ており、剣道では神前・師や相手に対して行なうものであり、イスラム教ではアラーに対する礼拝以外には、このようなことはしないのである。だから稽古始めと稽古終わりの座礼は、イスラム社会では、剣道の礼法であろうと強制することはできないので礼法における形には工夫が必要なのである。

2. 格闘性

古代より有事において自守自衛・戦闘のために身につけるものとして発展してきた剣道は、対人で行ない相互に技能を競い合う格闘形式のものであり、それも竹刀を用いて離れて相対し、技能を出し合うもので技術的要素の占める割合が多い。この技術面に関しては相手の変化に応じて攻防するもので、集中力・自制力・忍耐力・積極性など対人的な精神の働きの要求される。そして、竹刀で打ち合うもので格闘性を含んでおり、ややもすると単なる打ち合いのみの感情的行為になる恐れさえある。よって、相手を尊重する立場から礼儀を重んじることが必要とされるのである。

アラブでの指導の際、相手を実際に打ち込むことのみに興味をもつ傾向がある。それは相手を打ち負かすということが自分は強く、人より優位であるという優越感をもちたがるアラブ人の気質からきているものと思われる。⁽²⁷⁾

アラブ世界は砂漠が多く、そこには今でも各部族が住んでいる。この砂漠は厳しい環境であり、各部族の人々は部族と自己の生活を守るため、その厳しい自然と戦い、さらに歴史的にも砂漠の各部族と互いに戦ってきた。この部族の間には、「家族のメンバーが他の部族のメンバーを殺害した場合、グループ間や部族間の争いを引き起こすことがある。このようなとき政府は両

者間の敵意をなだめるため、両当事者を裁判にかけることを中止し、彼等のもめごとを砂漠民の慣習法にもとずいて解決するよう両グループの長老に解決をませる。」⁽²⁸⁾といわれるような争い事が多くある。そこには政府権力は介入せず彼等自身に解決させるのである。それは、復しゅう・仇討ちが社会的に容認された形式をとると思われ、「目には目・歯には歯」というような、やられたらやり返すという攻撃的かつ闘争的な気質をもっているのがアラブ人だといえる。

このような攻撃的・闘争的気質が激しいアラブ人が剣道を行なうにあたり、互いに打ちあうことから感情的におちいる恐れがある。しかし、アラブ人には宗教において礼儀作法が厳しく規定されていて、礼儀に対し敏感であるので、剣道は感情的に行なうことは礼儀に反することであり、形を崩さず正確に打つことことが剣道および相手に対しての礼儀であることを理解させ、指導することが重要であると思われる。

3. 尊重

剣道に「交剣知愛」ということがいわれるが、これは相互の人格を認めあって相手の重要性を認めた上で相互に協力して稽古することを含み、相手を尊重する気持ちを持ち礼儀正しく接するとも意味する。このように相手の立場を尊び、礼儀を尽くすということは剣道の目的の一つでもあり、互いの剣道の質向上にも必要と思われる。

自分の剣道を成立させ、発展させ、進歩させてくれるために大きな役割をしてくれるのは相手であることから、その相手が後輩や、いかなる人であろうと、これに感謝と敬意を表し、相手を尊重して相互に礼儀を尽くすということは、真剣に剣道を志すものにとっては、当たり前のことといわなければならない。

アラブ人の特徴に誇り高いところがあり、自らを尊び他人から尊重してもらうことを非常に重視する。我々日本人と異なりアラブ人は、その宗教・習慣伝統・生活方法に誇りをもち、それらのことに対し優越性を信じている人々

はいないと思われる。⁽²⁹⁾ そして、さらに伝統や習慣を尊重してくれる人や生き方を理解してくれる人には感謝をすることを彼等との生活において経験してきた。これらのことは、アラブ人の社会生活においてであり、スポーツの中でのことではない。しかし、いかなる場所であれ、彼等の特徴からして彼等を理解して対処すれば彼等との関係は、よき方向へ進むはずである。⁽³⁰⁾

以上のことは、剣道の稽古上とアラブの生活上からの相手への尊重と違った観点から尊重の重要性を述べたものであるが、後者側からして、アラブ人は一方的に自分だけに尊重してほしいようにみえる。だが、生活に限らず特に剣道指導時において指導者自身誇りをもち、相手の誇りを尊重し、接することが重要で、それによって彼等は、よき指導者とみなし剣道においても高い技能をもつ指導者として大切に接し、慕ってくれるのである。

4. 師

剣道において師と弟子の関係は特別のものがあり、弟子は師を敬い絶対服従で上下関係が明確である。そして、師は弟子へ技術を伝授し、さらに奥伝・秘伝と授けられて将来まで道を開く面倒までみるのである。だから弟子の師への尊敬は一生消えるものではなく、消すべきではないのである。

アラブでは師は弟子に対し、より多くの技術・能力をもって、その優越感で対応しようとする。弟子も師に対しては、ただ技術をもっている人で、それを教授するだけの人とみなし日本でいう師弟関係は存在しない。それはイスラム社会でいう喜捨という貧しいものへの施しをしなければならないとする習慣からきているとされている。⁽³¹⁾ また、彼等は教師とは教養・技術を教える師であって、人の上に立つ指導者ではなく、日本の教師のように知識から人間性までの教育を行うとする感覚はないのである。⁽³²⁾ 実際の指導においても教師である以上、弟子に教えることが義務であり、より速く上達するようにせよという態度が強く感謝の思いがないような態度をアラブ人はみせるのである。それはアラブでは宗教で独創そのものが否定されている傾向にあり、ただ教養ある人が弟子に教授するのみで、教師対弟子の関係は平凡で指

導が終われば人間対人間となり、そこには全く師弟の形がないのである。⁽³³⁾

これは、すべて神が中心とする表れの習慣であり、初めのうちは、そのような態度があらわれるが、一方では技術等をもつ人には敬意を払う面があるので強く剣道の師弟関係を悟し、すべての面に理解ができる弟子をつくることが肝要である。そうすれば、おのずから全体がその弟子に導かれる形態が形成されて指導がスムーズに進行し、師弟関係等も理解しはじめるのである。そしてアラブ人は自分だけ特別扱いされたいと思う気質から、他人よりも師から気に入られるように競い目立つように尽くす態度をとるようになる。だから指導者に対して理解できる能力のある人物を弟子とすることが師弟関係をつくるのに最良といえるのである。

5. 指導者

日本の尊称として使われる言葉に「先生」がある。この「先生」は先に生まれたという先輩、一般社会にいう医者、弁護士、政治家等に、そして、教授、講師、教諭等の学校の教師が含まれる。剣道の「先生」という場合は一般道場の指導者、警察等の教官、学校教育における正課・課外の剣道を担当する教師があげられる。なかでも学校の「先生（教師）」とは、教育職員免許法⁽³⁴⁾による免許取得者で学校の授業を担当し、かつ学校全般の教育担当職務を離れても、なお指導者として信頼と尊敬を深めている人を指す。換言すれば、職場を離れても教え子に対する広い意味でのガイダンスを引き受けている。そこで正課・課外において剣道を指導を行う「先生」も剣道教師といえるのである。

しかし、道場・警察等の「先生（教師）」は法律で定める規定はなく、各自の主旨・目的に応じた指導・教育を行うものであるが、そこには剣道の修練を通じて技術習得を行いながら、身体・精神・社会的側面を養い、教育の目的でもある剣道の理念に示された「人間形成」を目指した指導を行っている。もちろん学校の「先生」と同様に社会的に信頼と尊敬も受けているのである。このように剣道の「先生（教師）」とは、剣道の技術・知識を教授す

るとともに生徒の上に立ち、教育も行い指導的立場をもつ人でなければならず、技術・教養・人格のすべてを持ち備えなければならない。

アラブにおいて、日本の「先生」にあたる言葉は次のように分けて呼ばれている。

1. 高校までの教師を「ムダレス」。
2. 道場の教師を「ムダリブ」。
3. 大学の教師を「プロフェッサー」。
4. 博士・医者・大学院出身者を「ドクトール」。
5. 文化伝達・指導の専門家を「ハビリ」。

というのである。

アラブの教師に対する意識は前述したとおり、知識・技術を教授する人であり、人間対人間で学習期間だけのものである。そこには技術者・知識人として尊敬はしているものの、日本にいう師弟関係といえるものは存在しないのである。⁽³⁵⁾ よってアラブでの教師は日本と違い、人間・人生の指導までかわることはなく、指導的立場の人としての信頼・尊敬も存在しない。各教師の技術・知識の教え以外には指導を受けることはしないのである。これは教師というのは、生徒の上に立つ指導的立場を、もたないことを意味するのである。アラブでは一般的に指導的立場にある人は、どのような人をさすかというと、職業に関わることなくイスラム法で規定された、すべてのことに協議で決定する能力を持ち、公正さがあり、人々より指導者としての神への忠誠をきわめた条件を備えたる者が指導者となり得ることができるのである。⁽³⁶⁾

ここには知識・技術の指導者と人の上に立つ指導者とは、はっきり区別しているのである。よって日本からアラブ社会へ出向した場合、アラブ人は剣道の教師をすべての面で指導的立場にある教師としてみなすことはないのである。これは剣道の世界ではあってはならないことで、日本でいう「教師」という意味を十分に理解させなければならない。一般的にどこの国でも自民族優越主義が存在し、⁽³⁷⁾ 特にアラブ社会で剣道教師の意義を理解させるため

には、イスラムの習慣や歴史を考慮して少しずつ理解させていけば可能と思われるのである。

アラブ社会で集団が形成されるところには、必ずまとめ役でもあり、代表者でもある長老が生み出される。この長老は年齢のみで決まるわけではなく、そこには「徳」・「知」・「力」を総合的に加味した実力の世界が存在するのである。これは、どのような小さな組織から職能組織や教団・国家に至まで、このような指導者原理が貫徹するとされている。そして、前述したイスラム法で規定された人物が指導者として望ましいのである。アラブで日本的思考の教師とみなされるには、技術・知識はもちろん指導者の条件は日本の文化を身に付けること必須であり、指導経験に優れ、総合的にすべての面でアラブ人より実力を持ち備えなければならない。そこにはイスラム教を尊重しながらも、イスラム世界と相通じる教え・思想が剣道に含まれることを理解させ、カリスマ的存在になり指導するのが適切である。そのためにはアラブ人のために努力を惜しまず、アラブ人が剣道を行う目的を把握して、私利私欲のためでなく、アラブ人のための目標を立て、アラブ人が名誉を勝ち取れるまで育てることができれば、指導者は絶対的なものに近くなり、アラブ人はその指導者に対し、永遠に尊敬を持ち忠誠を尽くすものである。

六. むすびにかえて（回想）

2003年3月20日、湾岸戦争に次ぎ、アメリカのイラクに対するイラク戦争が勃発した。そのとき約4年にわたりイラクとイランが戦争状態にあった時、昭和56年7月～11月にイラクのバクッダトに滞在していた時のことを思い出した。昭和56年5月にイラクの空手使節団が来日し、日本武道（剣道・柔道・空手・相撲）との交流演武会が行われた。その後の交歓会において、団長よりイラク・フセイン大統領からのメッセージが伝えられ、その内容は剣道教師をイラクへの派遣依頼であった。その後、私に派遣の依頼があり、7月にイラクに出発することになった。出発までに入国手続きのためイラク大使館に足を運び、そこでイラクでの指導について尋ねたが、大

統領から剣道指導者を派遣依頼のテレックスが送られてきたのみで、大使館では何もわからないとの返事であった。とりあえず指導に必要な用具である剣道具・剣道着・袴50組、竹刀100本、木刀50本を用意して出発した。

約20時間の空の旅であったが、大統領の客ということで機内では手厚いもてなしを受け、さほど疲れもなく無事バクダット空港に到着した。タラップを降りると、私一人が乗るための車内中央にテーブルがあるバスが用意されており、二人の自動小銃を持った兵隊がガードし、VIPルームに案内されノーチェックで入国した。入国後は外務省の役人からバクダットホテルに案内され、そのホテルで、どこからも何の連絡もなく少し不安であったが1週間過ごした。1週間過ぎたところで大統領府の高官があらわれ、私のことを確認をし、翌日から情報省の役人（案内役）とドライバーをつけることを告げられた。後に知り合った日本人から1週間位待たされるのはアラブでは珍しくないことを教えられた。翌日には政府ナンバーのベンツのリムジンで案内人とドライバーが来て、その日から私の世話をしてくれることになり、二人とも優しく、すぐにお互いに信頼をもてる関係となった。

数日後、いつもになく慌ただしく私のところへ来て、指導を受けたいという人物のところへ会いに行くということで、その人物のところへ案内された。そこは大統領宮殿で天井いっぱいにシャンデリアがある広い居間に通された（戦争で破壊されたシャンデリアの部屋がTVで放映された場所）。ここで5人の青年が入ってきて、その中の一人が自分が剣道を教えてほしいと申し出た（その中の4人は年齢、背丈からダミーの感じであった）。その青年は、イラク、フセイン大統領の長男ウダイで自分が自分の意思で剣道を学びたいとの意向であった。それは本人が日本武道愛好家で空手を学んでおり、極秘で来日した時に、剣道を見たことが発端であると話した。この時、ウダイとの話し合いで、毎朝7時～8時までの1時間稽古を行うことになり（金曜日を除く、イスラムは金曜日休日）、稽古の場所は、その日の朝に伝えられ毎回場所が変わることを確認した。それは政敵による暗殺を防止するためと側

近から説明があった。我々、一般の平和ボケの日本人には考えられないことである。

この日、ホテルに帰る時にウダイから宿泊先をたずねられ、バクッダトホテルと言うと、ウダイがマンスール地区のメリアホテルに移るように側近に話し、その日にマンスール・メリアホテルに移った。このホテルはチグリス川沿いの大統領府の近くにあり、チグリス川を赤くそめる夕日が美しいところであった。

次の日から稽古を始めることになり、場所は毎回違う軍事施設内の武道場であった。出入り口、窓側に自動小銃を持った兵隊2名と私服の護衛5名に見守られながらの稽古であった。更衣にはウダイも裸となり、剣道着・袴に着替えの時は、私が指導し、側近は肌に触らないようにと心配していた。稽古中に竹刀でたたき指導をすると自動小銃とピストルがこちらに向くことがあったが、ウダイは気にすることもなくウダイの「ノー」と言う一言で、それはなくなった。ウダイについては凶暴で冷血人間と報道されているが、私に対しては道場の出入りや、稽古の始めと終わりに座礼をして礼儀を尽くした。イスラムでは神（アラー）以外には頭を下げることはなく、側近たちはこれをやめさせるように言ってきた。次回からは、礼儀というものは心が第一であると説明し、座礼ではなく正座のすがたで気持ちを込めた目礼をすることで側近は納得した。しかし、いつもウダイは道場の出入りと稽古の始めと終わりには頭を下げた。世間では極悪人と報道されているウダイであるが、このような姿は日本武道を理解する武道愛好家にみえ、悪評と違った一面をみせた。イラクにおいてだけではなく、アラブ諸国のなかで竹刀を握り、日本武道を愛し、剣道を初めて行ったのはウダイではないだろうか。

イラク滞在中に何度も大統領宮殿に行き、正面入り口手前にはハムラビ王が法典を持った像があったが、宮殿占領のときの映像では、この像は見当たらなかった。正面玄関の凱旋門がTV写っていたが、この門はフセイン政権下では国家元首のみ通ることができる門であると聞かされていた。宮殿占領

後のTVで戦車、兵隊、マスコミが通ているのを見て戦争により敗戦国となれば権威あるものすべてが否定され、指導者の栄光から権威あるものすべてを失い、敗戦国のみじめさを思いしらされた。

今回のイラク戦争でのイラク攻撃に対する大義名分はいくらでもあると思うが、アラブには独自の文化があり、我々には理解できないものもあり、自分の尺度で何事も見てはならないことを痛感した。最後にいろいろな悪評があるウダイであるが、私の教え子である以上、不幸な最後であったことは心の痛みであり冥福を祈る。

注

- (1) アラビア語やイスラム法と考えてよい。
- (2) 牧野信也「アラブ的思想様式」講談社 1986 P28-29
- (3) サハニ・ハマディ「アラブ人の気質と性格」笠原佳雄訳 サイマル出版会 1974 P2
- (4) 勝部真長「武士道」角川書店 1976 P154
- (5) 渡辺一郎「武道の名著」東京コピー出版部 1979 P52
- (6) 渡辺一郎 前掲書(5) P62
- (7) 蒲生礼一「イスラーム」岩波書店 1967 P107-108
- (8) 小沢愛次郎「皇国剣道史」日本出版 1944 P21-22
- (9) 下川潮「剣道の発達」再版 大日本武徳会本部 1931
P43
- (10) 加賀谷寛「イスラム思想」大阪書籍 1986 P21-22
- (11) サハニ・ハマディ 前掲書(3) P81-83
- (12) 新渡戸稲造「武士道」岩波書店 1965 P68
- (13) 大道寺友山「武道初心集」徳間書店 1971 武士と禅宗とのつながりから「文武両道」を説く。
- (14) 奈良本辰也「武士道の系譜」中央公論社 1976 P97-98
- (15) 板垣雄三編「講座イスラム4. -イスラム・価値と象徴-」
筑摩書房 1986 P48-58

- (16) サハニ・ハマディ 前掲書 (3) P 46-47
- (17) 古川哲史「日本倫理思想史研究2. 一武士道の思想とその周辺一」
福村書房 P 89
- (18) サハニ・ハマディ 前掲書 (3) P 82
- (19) サハニ・ハマディ 前掲書 (3) P 2
- (20) サハニ・ハマディ 前掲書 (3) P 2
- (21) 小川忠太郎「剣と禅」人間禅教団出版部 1985 P 53-65
- (22) 加賀谷寛「イスラム思想」大阪書籍 1986 P 36
- (23) 前島信次「イスラム文化と歴史」誠文堂新光社 1984
P 65-80
- (24) 笹森順造「剣道」旺文社 1868 P 28
- (25) 高野弘正「剣道及剣道史」平凡社 1937 P 43
- (26) 亀山文之輔著・発行「剣道修行」1933 P 14
- (27) サハニ・ハマディ 前掲書 (3) P 45
- (28) サハニ・ハマディ 前掲書 (3) P 26-27
- (29) 田村秀治「アラブ外交史55年・上」勁草書房 1983 P 6
- (30) 津田隆治「中東とアラブ人」講談社 1982 P 165-166
- (31) 佐々木良昭「アラブの発想・日本の発想」明日香出版社 1984
P 107
- (32) A・B・エル・セバイ「イスラームと日本人」潮文社 1981
P 202-203
- (33) 佐々木良昭 前掲書 (31) P 108
- (34) 木田宏「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第一法規出版
1968 P 223-226
- (35) 佐々木良昭 前掲書 (32) P 107-110
- (36) A・B・エル・セバイ 前掲書 (32) P 206-208
- (37) 古田暁監修「異文化コミュニケーション」有斐閣 1987
P 119